

# 耕作放棄地 再利用の芽

耕作放棄地を再利用し、神棚に供えるサカキなど日陰での栽培に適した作物を育てながら太陽光発電も同時に行う「ソーラーシェアリング」の実証実験が美里町で始まった。広さ約1500平方メートルの耕作放棄地に約780平方メートルの太陽光パネルを設置。一般家庭約45世帯の電気をまかなえる144キロワットを発電する能力があり、年間約600万円の売電収入を見込む。約720本植えたサカキも成長後に売却する一石二鳥を狙っている。

今回実験が始まった同町広木の土地はブルーベリーを栽培していたが、土地との相性が悪く、昨年から耕作放棄地となっていた。地権者らは農業生産法人を5月にも設立し、農作業を請け負う。事業を運営する一般社団法人「メガソーラー機構」(東京都港区)は、草刈りや苗の購入にかかる経費のほか、地権者に1平方メートルあたり年間1000円の賃貸料を支払う。地権者の希望があれば、発電設備は事業が終わった後に無償で譲渡するという。



耕作放棄地に設置された「ソーラーシェアリング」の設備。パネルの下でサカキの苗が育つ(美里町で)

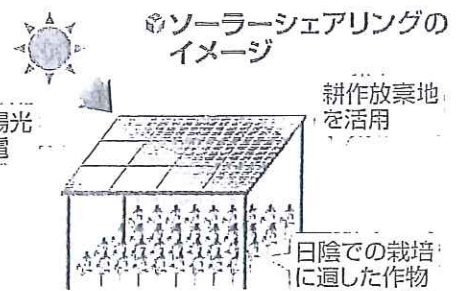
## 太陽光で売電

## パネル下で栽培

美里で「ソーラーシェアリング」

パネル1基約260平方メートルあたりの売電収入は年間約200万円。設置には約1800万円かかるが、整備費を入れても10年で回収できる計算だ。事業は20年間を予定しているが、2012年7月に始まった再生

可能エネルギー買い取り制度で電力会社がこの期間に電気を買い続けることが保証されている。使い道のなかった土地から収入が生まれるとあって、同機構が昨年9月、今年3月に開いた説明会には



約80人の地権者から計約20万平方メートルの申し込みがあった。同機構は今年度中に範囲を県北部に広げ、600基の設置を目指すという。

清水武司理事長は「すでに400基近い申し込みがあり、全て稼働すれば町の全世帯分を上回る発電量になる。耕作放棄地を解消し、農家が元気になる手助けをしたい」と話している。